

文庫書下ろし

長編心理サスペンス

ただ雪のように

新津きよみ

KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

文庫書下ろし／長編心理サスペンス

ただ雪^{ゆき}のように

著者 新津^{にい}きよみ^つ

2003年7月20日 初版1刷発行

発行者	八木沢一寿
印刷	慶昌堂印刷
製本	明泉堂製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Kiyomi Niitsu 2003

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73519-3 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

文庫書下ろし／長編心理サスペンス

ただ雪のように

にい つ
新津きよみ



光 文 社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

目次

第一章	再会	5
第二章	継母	38
第三章	鏡よ鏡	90
第四章	森の奥へ	142
第五章	毒りんご	187
第六章	闇夜の森	220
第七章	迷子の白雪姫	263
第八章	七人の小人	297
あとがき		337

第一章 再会

1

息継ぎのために言葉を切ったとき、ひなたに置いたミルクのような匂いが鼻孔をくすぐった。懐かしい匂いだ、と高森真琴は思った。たかもりまこと嫌いな匂いではなかった。かつて、自分は嗅ぐ立場ではなく、発散する立場だったのだ、と記憶にはない遠い過去を思い起こさせるような柔らかな懐かしい匂いだった。

ベビーベッドの中をのぞきこみ、つぶらな瞳がこちらを無心に見返しているのを確認して、真琴は深々とその懐かしい匂いを胸の奥まで吸い込んだ。そして、〈お話〉を語るのを再開した。

「魔法使いのお妃は、ふたたび鏡に尋ねました。『鏡よ鏡、世界でいちばん美しいのは

誰?』すると、鏡は答えました。『それは、森の奥で暮らしている白雪姫です。』「えっ、うそ! まだ生きてたの? おのれ!」、カンカンに怒ったお妃は、りんご売りのおばあさんに化けて森へ行きました。手にしたかごには、毒を塗ったりんごがどつきり盛られています。毒入りのりんごを白雪姫に食べさせて、殺してしまおうと企んだのです。白雪姫がいる小人たちの家の前に行くと、魔法使いのお妃は窓から声をかけました。猫撫で声を出してね。『娘さん、おいしいりんごはいらんかね?』

魔法使いになりきって、芝居じみた低い声を出したせいだろう。ベビーベッドの中でかすかな反応があった。小さな二枚のもみじのような手が宙を泳いだのだ。ふと見ると、もみじの手の持ち主は、餅のような白い柔肌に桜貝を埋め込んだように見える口元を緩ませている。

「あら、あなた、おかしいの?」

真琴は、りんご売りのおばあさんに化けた魔法使いのお妃から二十五歳の独身女性に戻り、ベビーベッドの姪に笑いかけた。

「ここは、笑うところじゃないんだよ」

生後四か月の姪は、あやしてもらっていると勘違いしてか、ますます盛んに手を動かした。「でも、ホント、おかしいよね」

真琴は、すっかり〈叔母さん〉の顔になって姪に話しかけた。「紐の次は櫛、櫛の次は毒りんご。あの手この手で、自分よりきれいな白雪姫を殺そうとするなんてね。そんな回りくどいことをしなくても、一気にその胸に短剣でも突き立てちゃえばいいのにね。どうせ、変身してお妃だつてことがわからなくなつてゐるんだから。ねえ、あなたもそう思うでしょ？」

当然ながら、赤ん坊は答えを返さない。

「おかしいと言えば、童話つておかしいところだらけだね。シンデレラのガラスの靴だつてそう。あのサイズにぴったり合う足の娘がシンデレラだけだつたなんて、いくら何でもできすぎた話だと思わない？ シンデレラの足つて、何センチだつたのかしら。二十五センチ？ そんな大足であるわけないよね。ちなみに、わたしは二十三・五。じゃあ、白雪姫は二十二センチ？ 確かに小さな足だけど、でも、シンデレラのほかに足の小さな娘が一人もいなかったつてのもおかしいよね。そんなに人口が少ない国だったのかしら。シンデレラを捜す手掛かりが、ガラスの靴だけつてのも変でしょう？ 王子様の印象にいちばん残つてゐるのは顔のほず。だつたら、似顔絵でも描いて捜し回つたほうが効率的だと思わない？ もっとも、初対面でろくに話もせず、顔だけ見て結婚を決めちゃうような王子様よ。あなた、そんな男と結婚したいと思う？ 女の価値を顔だけで決める男なんて、しょせん、たいした

男じゃないよ。でも、自分が舞踏会に行けば絶対に王子様に見初められる、って思い込んでたシンデレラも同類かもしれない。再婚相手の性悪な本性を見抜けなかったシンデレラのお父さんは？ あれも大バカだよ。新しいお母さんと義理のお姉さんたちとの生活に娘が慣れるのを見届けずに、仕事のために遠くへ行っちゃうなんてさ。無責任もいいところ。『白雪姫』にしたって同じよ。あのね、わたしも子供のころ、最初に『白雪姫』の物語を聞いたとき、何か変だと感じたの。だけど、どこがどう変なのか、そのときはよくわからなかったの。だけど、もうちょっと大人になると変なところってのがわかってきた。たとえば、継母に殺されかけて、一見、哀れに見える白雪姫。小人たちに『誰か来ても絶対にドアを開けてはダメ』と注意を受けてたくせに、いとも簡単にドアを開けてしまう。しかも、一度ならずも三度までも。危険な目に遭っても、少しも学習能力のない小娘。そして、何と言っても、あの魔法の鏡。うそをつけないようにできている鏡らしいけど、『世界でいちばん美しいのは誰か』と聞かれて、最初は『お妃様です』、白雪姫が成長してからは『白雪姫です』って即答する。どうして即答できるんだろう。そこがわたしは不思議でならなかったんだ。一体、魔法の鏡は、美の基準をどこに置いているんだろう。その国には、お妃と白雪姫のほかには、きれいな女は一人もいないってことなのか。『シンデレラ』と同じで、よっぽど人口の少ない国のお話なのか。義理とはいえ、母親と娘の話。年代が違う女同士ってことだよ。母親

の年代の女性の美。娘の年代の女性の美。この二つの美を、魔法の鏡はどうやって比較したのか。成熟した大人の女の魅力。はちきれんばかりの若さの魅力。結局、お妃でもあり、義理の母親でもある魔女は、美そのものよりも、白雪姫の若さに嫉妬したのでは……なんて、ちよつと大人になったわたし——あなたの叔母さん——は考えたわけよ。若さだけは、どんなに努力しても得られるものじゃないからね。……ああ、あなたの叔母さんは、このあいだ二十五歳になったのよ。ひと昔前の言葉を借りれば、お肌の曲がり角年齢ね。あなたのそのしわやしみ一つない、お餅のような白くてみずみずしいお肌が羨ましいわ。それこそ、魔法が使えたら、徹夜しても目の下に隈がでない、目尻に笑いじわができたりしないピンピンの肌がほしい。お妃は魔法使いだったんでしょ？ 魔法が使えるんだったら、白雪姫よりもっと若くて美しい美女に変身すればいいのに、と思ったものよ。ほらね、童話っておかしなところだらけでしょう？」

「ホント、そうよね」

起きるはずのない反応が背後で起きたので、真琴はドキツとして振り向いた。

「あつ、お帰りなさい」

大人に話すような口調で赤ん坊に話しかけていた行為が恥ずかしくて、真琴は肩をすくめた。話すのに夢中で、赤ん坊の母親である高森節子（せつこ）が帰宅したのに気づかなかった。節子は、

粉ミルクと紙オムツを買いに近所のドラッグストアに出かけていたのだった。真琴は、「ちよつとのあいだ、お留守番お願いね」と義姉に頼まれていた。兄の高森俊一しゅんいちは、名古屋に出張中で不在だ。

「ありがとう。泣かなかった？」

ダイニングテーブルに置いた買い物袋からミルクの缶と紙オムツを取り出しながら、節子はベビーベッドのある和室へと視線を向けた。

「ご機嫌でしたよ」

節子が留守にしていたのは、ほんの二十分だ。買い物に行く前にミルクはたっぷり与え、オムツも取り替えた。

「そう、よかった」

節子がベビーベッドに近づいた。にわかに姪の目にポツと明かりがともったように真琴には見えた。

「お利口だったね、小雪ちゃんこゆき」

母親の声に、真琴のときより大きく赤ん坊の口元が緩んだ。その目は、もう叔母さんの顔を見てはくれない。ずっと母親の顔を追っている。一抹の寂しさを覚えて、真琴は姪の視野からはずれ、ダイニングテーブルの椅子に座った。ミルクの匂いは薄らいだが、消えてはい

ない。赤ん坊の飲むミルクの匂いは、3LDKの空間に充満しているのだろう。

小雪。それが、この姪の名前である。命名したのは赤ん坊の両親だが、ヒントを与えたのは真琴だった。

「わあつ、この赤ちゃん、すっごく色白ね。雪のように真っ白。小さな白雪姫って感じ」

はじめて姪と対面したとき、透き通るように白い肌を見て、真琴は思わずそう口走った。そこから、小雪という名前が生まれたのだった。

「わたしって、バカですよ」

何かしゃべっていなければ赤面してしまいそうで、苦笑とともに真琴は言った。「小雪ちゃん、この世に生を受けてまだ四か月なのに、こんなプレゼントを買って来ちゃうなんて」「でも、いつかは役立つわ」

節子は、テーブルの上の分厚い本をちらりと見た。

真琴が手みやげに持参した世界名作童話集の一冊だった。その中に『白雪姫』も収録されている。言うまでもなく、グリム童話の中でももっとも有名な物語の一つである。

「いつかは役立つにしても、最初は、絵本にすべきだったよね。でも、本屋であれこれ物色しているうちに、何だかしつかりした本が買いたくなっちゃって」

子供の発達段階に応じて与える本があるはずなのに、真琴はその原則をまったく無視して

しまった。

「色白の小雪ちゃんを見てたら、自然と『白雪姫』のお話をしてあげたくなったの。だけど、この本はむずかしすぎるし。それで、自分で適当に話したほうが早いかな、と思つてね。と言つても、赤ちゃんに理解できるわけないのにね」

「言葉は理解できなくても、雰囲気はちゃんと感じ取つてゐるわよ。やさしい叔母さんが自分のために一生懸命、お話をしてくれてゐるんだつて。その本は、とりあえず母親のわたしが読ませていただくわ。童話つて、大人が読んでもおもしろいし……」

言いかけて、節子は何かに思い当たつた顔をした。「そうそう、子供のころに読んだ本を大人になつて改めて読み直すと、新しい発見があるものなのよね。自分が憶えていた話はこんなだったかな、と首をかしげたりしてね。たとえば、さっきの『白雪姫』。真琴さんは、お妃の魔女がどうやって死んだと認識してる？」

「雷に打たれて死んだんじゃないかな。ほうきに雷が落ちて」

違うパターンもあったかな、と記憶の領域を探りながら真琴は答えた。

「わたしが憶えているのは、白雪姫と王子様の結婚式に乗り込もうとしたお妃が捕まり、罰として真つ赤に焼いた鉄のスリッパを履かされる場面なの。『熱い、熱い、と跳ね回る姿は、まるで踊っているようです。お妃は、そうやって死ぬまで踊り続けました。一方、白雪姫と

王子様は、いつまでも幸せに暮らしました』ってラストは、子供ごころに理不尽に思えたわ。誰がそんな残酷な罰を思いついたんだろう、なぜ真っ赤に焼いた鉄のスリッパなんだろう、ってね」

「そう言えば、そういうラストのパターンもうつすらと憶えてます」

カラーの絵のついた絵本、字のほうが圧倒的に多い本、幼稚園での紙芝居、人形劇団によるお芝居……と、大人になるまでにさまざまな白雪姫に出会ったっけ、と思い出しながら、真琴は言った。

「真琴さんがさっき言ってたように、よくよく考えてみると、童話っておかしなところだらけなのよね。案外、残酷だし。でも、子供のころは疑問にも思わず、ひたすら続きをせがんで聞きたがった。童話には子供の心を惹きつけるような魅力があるんでしょうね」

「嫉妬とか猜疑心、虚栄心など、いろんな負の感情が凝縮されているせいかもしれない。それが、子供も大人も同時に惹きつける……」

「願望も」

と、節子が遠くを見る目をしてつけ加えた。

「願望？」

節子の表情がふっと陰ったのに、真琴は気づいた。

『白雪姫』の始まりは、確かこうでしょう？ 昔々、ある国のあるお城に王様とお姫様が住んでいました。二人には子供がいませんでした。神様、どうかわたしたちに子供を授けてください。二人は、一生懸命、神様に祈りました。願いが通じて、可愛い女の子が授かりました」

「あ……ああ、そうね」

義姉は、自分たち夫婦の姿を王様とお姫様の姿に重ね合わせているのだろう、と真琴は思った。小雪は、兄夫婦が結婚から六年目に授かった待望の女の子だった。

『白雪姫』だけじゃないわ。日本の昔話の『かぐや姫』や『桃太郎』にしてもそうよ。子供に恵まれないおじいさんとおばあさんが、それぞれ光る竹の中から、巨大な桃の中から子供を授かるっていうSF的な設定でしょう？ あれは、お世継ぎが重要な意味を持っていた時代、子供がほしくてもできない夫婦の願いを、物語の中で叶えてあげていたんじゃないかしら」

「シャルル・ペローの『眠りの森の姫』やアンデルセンの『親指姫』も、似たような設定ですよ。『親指姫』のほうは、一人ぼっちで暮らしているおばあさんの話だったけど」

——あるところに、一人ぼっちで寂しく暮らしているおばあさんがいました。おばあさんは、毎日、神様にお祈りしていました。「どうか、子供を授けてください」。ある日、おばあ

さんの前に女神様が現れて、小さな種を一粒渡すと消えてしまいました。おばあさんは、早速、その種を植木鉢に植え、毎日水をやり、大切に育てました。やがて、真っ赤な花が咲きました。その花はチューリップの花に似ていました。花のつぼみが開くと、中から親指ほどの小さな女の子が現れました。おばあさんは、その可愛らしい女の子を「親指姫」と名づけて、大事に大事に育てました……。

おばあさんは、自分の親指ほどの子供にどうやって服を着せ、どうやってブロンドの髪の毛をとかしたのだろう。子供のころの真琴は、それらが不思議でならなかった。ちょっと力を入れてつまめば、潰れてしまいそうな弱い小さな存在だ。

「わたしね、『かぐや姫』や『桃太郎』に出てくるおばあさんも、『親指姫』の孤独なおばあさんも、本当はそんなに年を取ってなかったんじゃないか、と思うの」

「おばあさんじゃなかった？」

「その時代に見てみれば、立派なおばあさんだったかもしれない。いまの五十歳はおばあさんじゃないけど、昔なら『おばあさん』と呼ばれたかもしれないでしょう？ おばあさんというのは、つまり、子供を産める年を過ぎた女性のことを指しているんじゃないかしら。いまなら、四十代半ばくらいかしら。その年代の夫婦が、まだ子供を諦めきれなくて、神様に『子供を授けてください。最後の頼みです』とお願いしてたのよ。もし、本当に六十代、七